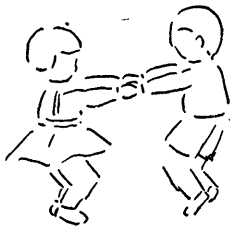

お遊戯会のあり方（二）

――幼児の実態から考えられるもの――

樋口三紀子

〈好ましい会の内容〉

お遊戯会の外郭的な面については先月号に述べたので、今回は主としてその内容について述べてみよう。

〝望ましいお遊戯会〟の項ですでに述べたように、お遊戯会は幼児の保育所における生活発表会として催すべきで、彼らの成長を楽しみに待っていた人々へ感謝と報告の意味を含むべきである。一貫した保育の流れの中で幼児のありのままの姿をみていただくならば、彼らが今日までに歩んできた成長への足どりは、見る人にも明瞭に理解していただけるはずである。このような意味で催すべきお遊戯会は具体的にどのような内容をもつことが望ましいか、次に検討してみよう。

現在お遊戯会にとりあげられている舞踊や劇の内容的意味についてみると、すでに述べた「桜井の別れ」や「白虎隊」などがよく演じられており、これらは幼児教育の立場から考えて多くの問題点をもつものである。白装束で刀を振りまわし切腹して果てる白虎隊を演ずるのは何が目的であろう。まさか殉死してまで表わす忠義の心を養うのではあるまい。見物のおとな達

は過ぎし時代の風習になつかしさを感じ、真剣な表情で踊る子どもをみて涙を流すかもしれない。しかしおとなを満足させるために幼児の演技を利用することはたいへんなあやまちである。命の大切さを教え、害虫を殺すにも弁解するほどの保育をしながら切腹に無頓着であるのは何故であろう。「幼児に深い意味はわからないから」と楽観している人もあるが、意味のわからないものを演じることはますます好ましくないと言わねばなるまい。このように保育の目的からかけはなれたもの、全く幼児に理解できないものを無理に教えこんでいる場合がしばしばみられるが、こういった事実はすぐにも改められるべきではあるまいか。なによりも必要なことは、幼児自身が心にあるものを自ら表現しようとする意欲をもつことである。最近幼児が日常生活において経験し得た事柄をおもしろくまとめた劇遊びがいろいろな人々によって創作されるようになった。例えば「大きな大根」のお話のように、大きくなった大根がお爺さんひとりの力ではどうしてもぬけない。そこで猫や鶏や犬などが手伝って引っぱることになる。ところが大根が抜けたとたん勢い余って皆はしりもちをついてしまう。そしてその大きな大根を皆でごちそうになるというものであるが、このような内容なら幼児は容易に理解できるだろう。子ども達は力を合わせれば重いテーブルでも運べることを日常経験している。また彼らは協力して目的を果した喜びと勢い余って思わぬ失敗をしたおかしさもわかり、思わず声をたてて笑う。大根を仲よくわけ合って食べる話も、日常いろいろな機会に教えられてきたことであるから理解でき、それを幼児自身のことばとして表現することによって更に明確にその精神を認識し獲得していくだろう。このように幼児がしばしば経験し、理解することのできるものならば、その内容を彼らはとても楽しい遊びとして表現することができるだろう。

また一方、日常生活に直接結びついたものでなくても、子ども達がお話の世界の人物になって美しく心に描いているものを表現するのも楽しいことである。「七匹の仔羊」「三匹の仔豚」などのお話を子ども達は日常人形劇や童話などでよくきいている。だからお話の筋や役柄をだんだんにおぼえて彼ら自身が話せるようになり、時には、年長児が年少の子どもを集めて紙芝居をしているのをみることがある。字は読めないから適当に自分で台詞を創作して話しているのである。こういった状態はやがて劇遊びに発展していく。保母がほんのちょっと指導の手を

さしのべるだけで、生活発表会に、より楽しく表現することができるのである。

またできあがった物語を使わなくても、毎日幼児の行動を観察していると、生活発表会に再現したいものがたくさんある。

九月の初旬、私は次のような状景をみた。私がガラス越しにのぞいた窓の下で三人の男の子が「ヨイショヨイショ　もう少しもう少し」と夢中になってさけんでいた。それは蟻が巣に何かを運んでいるところで、その蟻が巣の近くまでくると、他の蟻が巣から出てきたらしく、「あっ、きたきた、また一匹きたよ」「あっ、一しょに運ぶよ」「入ったはいった」「もうみえないや」。やがてお部屋の入口からドヤドヤと私の方へやってきた彼らは、「今ネ、蟻がネ、虫みたいなものを巣へもって入ったヨ」「蟻がネ、石の所であんまり重たいから休もうと思ったら、他の蟻が助けにきたからよかったんよ」とおもしろい観察の結果を報告してくれた。更に「巣の中に卵があるネ」「巣の中は道がクニャクニャ曲っているネ」「蟻の女王様がいるんでしょ」とお話や絵で見聞したこともつけ加えた。私が、蟻さんのお話……と歌い始めると男の子達はてれたような顔をしていたが、そばで話を聞いていた女の子達がその続きを歌い出し、踊り始めた。私がみたのはこれだけの内容であるが、この中にはリズム遊びとなり、劇遊びとなる要素は多分にある。このような経験を子ども達の生活発表会に楽しい遊びとしていかに再現さすかは、保育者の努力によるもので、保育者の重要な仕事の一つである。

すでにできあがっている作品、或いは新しく創作する作品と生活発表の方法はいずれにせよ、その内容は日々の保育の流れからはずれないものであるべきだと思う。それはまた同時に幼児の実態に則したものであることを意味するものである。そして幼児の生活全体が表現されるように内容も広い分野にわたるものでありたい。

私の試みとして先に述べた「森の四季」などはまだまだ恥ずかしいものであるが、実際にやってみて内心よかったと思う点は、子ども達が劇遊びに参加することを、とても喜び、発表の日もいつもと変らない楽しそうな表情でのびのびとした態度がみえたことである。

〈発表方法の再考 Ⅰ〉

リズムについて

発表方法についても多くの人々によって検討され、望ましい方法が示されているにもかかわらず、現在のお遊戯会はいわゆる舞踊によって大部分が占められている。そこでこれらの舞踊について、主としてリズム教育の観点から述べてみよう。お遊戯会にみられる舞踊には、日本舞踊の領域に入るもの、或いはバレーをとり入れたもの、また、そのどちらの形式でもないが幼児舞踊として構成されたものなどがある。日本舞踊やバレーはそれ自体完成されたものであり、問題はないが、保育所において幼児のリズム教育の手段としてとり入れるべきものではない。その理由はいろいろあるが、動きのリズムの点からみて両者とも特殊なものである。例えば、一つの歩く動作についてみても、内またであるいたり、不自然なほど外またで歩いたり、トウシューズによってつま先で歩いたりする。舞踊全体が身体の自然な動きの連続ではなく、いくつかのポーズが組み合わされたものである。また、最近幼児の舞踊として作られ、お遊戯会にとりあげられているものをみると、見ためにはかわいいものかもしれないが、それらの殆んどが結局ポーズの組み合わせによるものであり、手先、足先だけの踊りが多い。しかし日常の保育にバレーや日本舞踊をとり入れている所はもちろんないであろう。それにもかかわらずお遊戯会のためにこのような特殊なリズム指導が行なわれているのは、幼児にとってたいへんな負担である。

保育所における幼児のリズム教育、主として動きのリズム指導の目標はそんなものではない。私達保育者は幼児がリズミカルな動きを楽しみ、のびのびとした美しい動きができるようにと考えて毎日の保育を行なっているはずである。幼児に望む美しい動きのリズムとは身体の自然な動きであり、そこから生まれ得るリズムではなかろうか。生活発表会にバレーや日本舞踊のポーズを借りないでも、自然な身体のこなしができるようになった幼児のありのままの姿こそ美しいものとして表現させるべきである。

「アンダンテカンタービレ」「コッペリア」のような歌のない曲をレコードで流してやると、子ども達は両手を頭上でゆらゆらと動かしたり、手をひろげて波に乗ったように身体をのびあがらせたり、ちぢめたり、回転したり、保育室いっぱいに動

きまわる。真似をするものもあり、思いおもいの方向に勝手に動くものもある。単純ではあるが、群舞を思わせるまでに発展することがある。「ナトマーの剣舞」のように小刻みなリズムで強い感じの曲には、前者のそれとは全く異った表現をする。例えば足を床に強くふみならし、手はにぎりこぶしにして、前・横・下と打ちつけるように伸ばす。もっと強い表現をと首をかしげ工夫をこらしながら動いている様子がおもしろく観察される。これはレコートの曲の感じを表現した彼らの動きであるが、それには手先・足先だけの運動はみられず身体全体を使い、単なるポーズはみられない。三歳児でさえ、女の子が二人集まると、何やら勝手な歌を創作しながら口ずさみ、両手をつないで振ったり上半身を右左に傾けて顔をみ合わせたりしている。また、いつか風の強い日、庭の柳がゆれるのをみて、男の子が「先生、風が吹いてるんヨ」と肩から手を動かしながら走りはじめた。そして先生は柳になってくれと注文し、私のまわりを通り過ぎては帰ってくる。このようなちょっとした動きのスケッチなども、保母の手で伴奏がつけられるなら、すばらしい作品になるだろう。テキスト片手に「手をたたいて一二三、次に右足のかかとを前にトン……」と教えこませるよりも、幼児自身の表現をありのまま発表する方がどんなにか楽しいものになるであろう。童謡の振り付を踊る場合も、ことば的表現に気をとらわれず、幼児の成長した体の動きを表現できるようなものを選ぶことが大切だと思う。

〈発表方法の再考 Ⅱ〉

言語について

先日私は、ある話し方大会に出席した。それは、幼児から青年までが参加できるものであった。私はそれに参加していろいろ学ぶところがあった。私の考えていたいわゆる弁論調がなく、自然な話し方をした人が殆んどであった。しかし幼児の部に入って意外であったのは、おとなの文章やことばを暗記して話している子どもや、途中で話すことを忘れてしまって、舞台の横で一生懸命教えている先生らしい人の方ばかり気をとられ最後まで横向きで話した子どもなどが多くあったことである。中でも気にかかったのは、六人グループで紙芝居をした子ども達の話し方である。ひとりが一枚の絵を見せてはその説明をし、六人の子どもが順送りに交代するのである。順番を待って

いる時の彼らの表情は、個性があり、それぞれとてもかわいいのに、話し方については全く個性のない一本調子のものであった。すなわち、六人の話し手が一種変ったふしのついた調子で押し通し、見ていなければ弁士交代も気づかない位のものであった。この一種変ったふしのために、ことばのアクセントが全く逆になることが多く、ことばとことばの間についても殆んど無視されていた。方言とも関係のないこの口調に私は疑問の念をいだきながらきいた。多分、保育者の口調を復唱して憶えたものか、或いは決められたことばを練習するうちに、すらすらと言えるようになり、ことばの流れに気をとられて、ことばの基本的なアクセントや、意味が忘れられ、全く感情のこもらないものになってしまったのではあるまいか。これらはお遊戯会の例ではないが、お遊戯会にみられる劇の台詞などにも同じことが言える。

幼児の言語指導の目標は、ことばの使い方を正しく、話を聞いて正しく理解できるように、そして物語などに興味をもつよう導く点にあると思う。幼児特有の過去と未来を間違ったり、助詞を使わなかったりすることばを正しくすることも大切であり、また話すことばに感情がこもっており、口から出まかせ式のことばを使わないように指導することも大切である。保育者は日々の保育に、このような目標をもって言語指導を行なってきたはずである。幼児のままごと遊びの挨拶やおしゃべりを聞いていると、保育者の日頃のことばが強く影響しており、苦笑させられることもあるが、またつくづくと彼らの成長を感じるのである。お遊戯会のために劇を行なう場合、とかくつくりつけられた台詞をそのまま教えこませたり、或いは保育者が考えた台詞を復唱させたりする傾向があるが、それらは幼児の言語能力を考え合わせた上でなければ危険である。台詞としてのきれいなことばを重要視し過ぎて、幼児の表現意欲を失ってしまったり、感情のこもらないものにしてしまうことのないよう指導上注意しなければならない。すなわち、生活発表会のためにきれいなことばを要求するのでなく、日頃の生活にそれを要求し、その要求によって得られた結果が自然な形で発表会に表現されることが望ましいと思う。

（つづく）

× × × × ×

× × × ×